

白金葎

7月号



平成29年7月発行

第77号

白金葭定例句会案内

九月十五日（金） 駒場吟行句会・駒場住区セ一時〜五時

九月二十二日（第四金） 正午〜三時第三兼題・美術の秋、秋鯖

十月二十日（金） 正午〜三時第三兼題・鶴、朝顔の実

兼題句参考句（九月二十二日分 美術の秋、秋鯖）

秋鯖を心祝ひのありて買ふ

宮下翠舟

秋鯖や上司罵るために酔ふ

草間時彦

秋鯖や味噌煮の味噌の多寡を問う

熊坂淑

夫と来てはなればなれに美術展

龍神悠紀子

絵筆すてしわれに美術の秋来れど

上村占魚

美術の秋上野にぼんと降り立ちて

高澤良一

院展や蓮の模様の帯しめて

依光陽子

日展の流れ三日の銀座かな

小野口正江

二科展の女の膺と向ひ合ふ

仲村美智子

あくびせる日展ガール膝毛布

衣川砂生

日展をふたたび訪ひて恋ふ絵あり

河野紀代乃

コーヒー喫む美術の秋の森の中

山口青邨

秋鯖に味噌は三河の八丁ぞ

吉田汀史

秋鯖の仕入ごころをそそのかす

鈴木真砂女

秋鯖の大の一尾を値切りある

佐藤鬼房

秋鯖の一本棒のどこ掴む

坂巻純子

月例句会報（17 / 7 / 21 9名欠4 青林檎、森林浴）

飯田孝三

おほいさま
大戦経たる山脈青林檎

神宮は東京の膺森林浴

雨傘をたたみパラソル朝顔市

山晴れて城見える町青林檎

木漏れ日の肌の的てきれき皫森林浴

光成高志

ひのきあすなるさわら
森林浴 檜 翌檜 榎の気

藩守りし檜木立や森林浴

青林檎手を経て箱に詰めらるゝ

いつまでもセンチメンタル青りんご

燕の子巢立ってわが家飛び廻る

光 みち

森林浴みんなでうたふ木遣歌

木のチップ敷かれ森林浴の道

学生服脱ぎみちのくへ青林檎
空梅雨の厨に浸すひじきかな
熊除けの鈴のなるなり木下闇

松村幸一

夕涼や消壺並ぶ煎餅屋
白粥に一休寺納豆夏の風邪
アルバムに一通の文青林檎
水馬の空見る眼空色に

忘れじの一人夜汽車の青林檎

浅野正美

ブロンズの女神と一緒に森林浴

受けて見よ抛るよ恋の青林檎

神楽坂夜店尽きれば相別れ

ぼうたんとして開けども水中花

吉羽多美子

闇の中飛び交ふ蛍ひかり帯
丸かじり青林檎汁ほとぼしる
森林浴風体内を吹き抜ける
木漏れ日の中歩みつつ森林浴
目覚めるや今朝も又熊蟬の声

蝙蝠や暮るゝに早き漁師町

武者昭七

紫を好む佛に紫陽花を

百合匂ふ佛間に喪服ぬいでをり

森林浴身の内青き風ぬける

青林檎我が青春に悔ひのあり

倉田紀子

遠つ世の海の色かも青りんご
探しても森林浴などない季寄せ
遠雷や遠ざかり行くもののけはひすれ
アカシヤの花房垂れて夜の雨
大空に神立つと見て白雨来る

パンワイン青林檎買う旅の市

磯目健二

炎帝の都ぞ遠し森林浴

梅雨明けや廁の窓の空の青

夏山路総身包む木の香かな

青林檎プールサイドで友と食む

青林檎恋てふものの愁ひ知る

森林浴方位未確の樹海にて

青林檎ここは信濃の古戦場

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

廃線の森林鉄道遠郭公

遁走の途中の蛇の尾を掴む

森林浴点滴余韻の睡魔とも

青林檎甘く噛み切る持ち時間

梅拾うどいつもこいつも太りぎみ

梅雨に濡れ句会に着いてすぐ出句

緑陰に常陸府中の鐘ドロボー

仲本興正

上野駅より子らは育ちぬ青りんご

森林浴女が小径よりふいと

まだ黒き雛も混じりて葦の陰

折り返す舟に葭切かまびすし

合同句碑藍紫陽花に埋もれけり

田宮敦子

ソーダ水九〇才はまだ若い

夏蝶や社の裏の竹箒

蝦蛄を取って来る子と触れぬ子

五平餅森林浴の木曽路かな

初恋の味には遠し青りんご

一句鑑賞

光成高志

木漏れ日の中歩みつつ森林浴

正美

句会ではもう一つの木洩れ日の句を難しい言葉に魅かれてとつたのであるが、掲句は森林浴を普通の言葉で書いてあるので、一晩寝て起きて再読してみると返って心に響いてきた。実は五月末森林浴発祥の地とし

て知られる信州木曾上松の赤沢自然休養林を歩いた。赤沢森林浴は今回で53回であるとか。季寄せにないという句もあつたように比較的新しい季語である。樹齢三百年を超える檜の天然林の中での森林浴は清流のせせらぎがあり、橋あり、野鳥のさえずりあり、木洩れ日ありの「木のチツプ敷かれ森林浴の道」(みち)の爽やかな散策でした。檜ヒノキ・翌檜アスナロ・榎サワラ・鼠子ネズコ・高野楨コウヤマキは芭蕉が江戸に出た頃禁伐木となり木曾五木と呼ばれるようなる。天正慶長の頃秀吉、家康が夫々直轄領として森林伐採を思うままに行つたが、これではいけないと寛文の頃から尾張藩が森林の保護政策をとり、以来三百余年守られてきたので、今に見られる天然林となつた。五木の直立した幹、その枝ぶりを仰ぎ、歩みつつ思ったことは自然に対する畏れでした。「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」とはこの気持であろうと思ひました。

森林浴みんでうたふ木遣歌

みち

散策ガイドがついて森林浴の遊歩道を歩く。ガイドは先の木下遊船のガイドと同じくよく喋る。その自慢が御神木伐採跡地への案内である。御杣始祭みそまはじめがここで行われたという切株の前で歌詞を手に捧げみんなに木遣り歌を歌わせる。作者が書き取つたその一部は「木曾の深山で育てたるヨイヨイヨイ日ノ本一

のこの檜ヨイヨイ伊勢の社に納めますエンヤラヨイトセ ヨイシヨイシヨ」というものである。

梅雨明けや廁の窓の青

健二

寺山修司に同じような句があると指摘されたので、調べると「便所より青空見えて啄木忌」であつて、掲句とは余情が全然違う。我々凡人はこういう作り方でもいいと思う。梅雨明けの季節感を便所の古語廁の窓に見た瞬間に言いとめられた。寺山修司の句は、「螢雪時代」昭和二十八年十一月号・俳句二席入選・中村草田男選」に載つたもので彼はまだ高校に入学したばかりであつた。まことに早熟でその才に感嘆する。

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

宏之助

句会の日は梅雨明け三日目、炎昼の日、一尺程の片陰に入って煙草を吸う。屋内は禁煙だからだ。ヘビースモーカーの心理は斯くの如くで、非喫煙者はこれを理解できないでしょう。下戸は上戸の心理がわからなさと類似している。その姿にかすかなフモールが漂う。それが俳味だと思ふ。フモールとは、個々の人間の愚かさも、愛すべき滑稽として受け入れるという意味だ。

一句鑑賞

磯目健二

受けて見よ抛るよ恋の青林檎

幸一

元気の良い恋の駆け引きを描く青春のワンカット。

恋の真剣度が高いほど自意識や羞恥心に邪魔され勇氣が要る。演戲あるいは独り相撲に終わろうと、決行すれば我が青春に悔いなしだ。シンボリックな青春の恋の小道具として青林檎に着目した機知、啖呵のごとき気っぷのいい音調が戲画的な俳味を醸している。蕉風の侘びさびの出発をなす「虚栗」に恋を吟じる艶麗な連句が並び芭蕉も賞揚していることは有名。

森林浴檜榿の気

高志

この三種の樹木はいずれも木の香が強いヒノキ科の常緑樹である。これらの木の樹間に身を置くととき特有の精油成分ヒノキチオールが匂い立つて快い山気に囲繞される。新春の季語「淑氣」のように天地の気配として「氣」と作者はそれをいうのである。それに全身を浸すことが理想的な森林浴となる。もともとヒノキ科の木は腐り難く、抗菌性が高く健康にいいことが知られている。

廃線の森林鉄道遠郭公

宏之助

山深く廃線跡が一筋真つ直ぐ遙か彼方まで続き山の端に没している。その無人の広い空間の果てから郭公の澄んだ鳴き声が聞こえてくる。過去の人間のすべての営為は廃墟となり在るのは山河のみ。芭蕉の「うきわれをさびしがらせよかんこどり」の句が思い浮かぶが、現代人の作者はその寂寥感とは無縁で、広く豊か

な自然そのものに飲びを抱く。

木漏れ日の肌の的礫森林浴

孝三

なんといつても句の肝は死語に近い「的礫」なる言葉である。いわばスポットライトというべき光線の到達点だ。木漏れ日が光の矢となって今しも歩み来た女性の白い肌に差し込み瞬間的に点となって照り映えたのである。夏の寛衣から覗く女性の素肌と木漏れ日の取り合わせは印象派の絵画のような上品なイロチズムを感じさせる。

大戦経たる山脈青林檎

孝三

大戦おおいき後の故郷の山脈に佇立し遠望する青年。その山をかりに津軽の岩木山とすれば情景は敗戦時の石坂洋次郎描く「青い山脈」の世界だ。国破れて山河ありは当時の日本人の等しく抱いた感慨だった。空前のベストセラーとなった理由もそこにある。それから茫々七十余年。そのかみの青年の日を作者は想起しているのだ。

一句鑑賞

武者昭七

忘れじの一人夜汽車の青林檎

幸一

かつての夜汽車にはふるさとを捨てて異郷に向かう者の悲しみのおいがあつた「男子郷関を出で・・・」などと勇ましい言葉を口にしてみてもそれはぬぐえな

かった。まして今はひとり旅。ささえるものは一個の青林檎だ。それは青春の恋情の形象である。「忘れ得ぬ」ではなく「忘れじ」という強い言葉に注意しよう。いまでも悲しみは老いの胸（失礼！）に秘められたまま生きているのである。

青林檎恋てふものの愁い知る

健二

青林檎我が青春に悔ひのあり

多美子

アルバムに一通の文青林檎

紀子

「青林檎」という兼題に接したとき僕の頭に浮かんだものは島崎藤村の「初恋」だった。「やさしく白き手をのべて林檎をわれに与えしは・・人恋そめし始めなり」という詩句の清新さは今でもなお新鮮である。掲出句三句はいずれもそんな初々しい痛みと恋ごころを秘めて優しい。思わずしばしばが青春を振り返って回想に足を止めてしまう。それにしても現代の若者たちは藤村のこの名詩を知るや知らずや。知らぬとすれば国語教育は重大な過ちをおかしている。あこがれ出るころこそが青春のあかしだからである。

梅雨明けや厠の窓の空の青

健二

厠という言い方もめつたに聞くことのないことばになつてしまった。トイレといまはいう。外に向かつて短冊形の無双窓と呼ばれる窓がひらいていた。そこから外がのぞけた。あるときそこから覗いていた空の青

さに作者はあつとおどろいたのだ。そうだ梅雨明けだった。改めて知る夏の空の青さとかがやき。空というものの大きさを知った一瞬だった。

森林浴女が小径よりふいと

興正

森林浴の最中に脇の小径から女が「ふいと」跳び出してきたというのだ。ああびつくりした。どんな女かなにをしたのか。ミステリーじみたところ面白い。

炎帝の都ぞ遠し森林浴

健二

「炎帝」は暑気の神様であり火の帝王。暑さに茹る大都會を遠く見下ろして作者は悠々と森林浴。なんと贅沢な。酷暑の都を遠く離れて得意げな帝王気分だ。堂々とした漢語調がそれをもりあげている。現代の帝王のうたである。

夏蝶や社の裏の竹箒

敦子

鬱蒼とした社の森はかつて神々の降臨したまう聖なる空間であった。神々はひとびとの乞いに応じて高々とそびえる大樹を伝つて地上に降り立った。聖なる空間を守る者は神官とよばれた。今その役をひきつぐものは巫女と呼ばれる若い女性たちだ。社の裏にひっそりと立てかけられた竹箒は彼女たちの仕事の名残である。しんと静まり返つた聖なる空間。夏蝶の影がそこをよぎっていく。忘れられ見落とされがちな、しかし

守りつがれなければならぬ涼やかな風景を作者は静かにみつめている。

一句鑑賞

飯田孝三

森林浴みんでうたふ木遣歌

みち

木遣歌は元々重い木材運びのいわば労働歌、大勢で掛声かけながら唄う。そこから、皆でうち揃つての祭礼や祝賀の歌に。森林浴は海水浴、日光浴になぞらえた市民のエクスカージョン、大抵はグループです。気の合った仲間同士歌いつつ緑の下を行き、森の生気を満喫する。心身甦る行楽の現場から、ふと遙かに労働の営為の昔を思うのである。さりげない「みんでうたふ」が彼我の時空を繋いで手柄。この句のいのかである。

夏蝶や社の裏の竹箒

敦子

一読、夏蝶の舞姿が目に入る懐しの風景である。夏蝶は現代的な風物との取合せも新鮮だが、この句にも又紛れなき夏蝶を見るのだ。舞台の新旧を問わぬ本物の夏蝶の姿がそこにある、だから切字「や」が利き、「社の裏」も「竹箒」も自己主張しない。この次は新舞台で夏蝶を見てみたい。

遠つ世の海の色かも青りんご

昭七

地球が青いと言つたのは、旧ソヴィエト初の宇宙飛行士、地球は水の惑星、万物のいのちは水中に生まれ育まれる。青は五行説では春の色、青春、青雲の志ほど広く未来を望む。又、日本の三原色の一つ、青、緑、藍にわたり植物繁茂の色、眼の前の青林檎一顆を見つめ、遙かの時空を辿つて、生命の原郷、太古の海の色を思うのである。観念の句ではない。眼前の「青林檎」に触発された感動の一句。古語「遠つ世とく」「かも」との呼応神妙、凛々「青りんご」が初々しい。「かも」の抱懐が魅力の一句。かな書き青「りんご」の用辞も周到だ。

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

宏之助

詠み口一変、一気によみ下した句。今更に自ずから愛煙家の思いがにじみ作者は微苦笑の態。それにしても現代はスモーカー受難の時代、何ともいぢらしいではないか。「尺程」が絶妙。いろは歌留多の昔から「三遍廻つて煙火にしょ」、せめて尺土の片陰、どうぞごゆるりと一服を。それにしては、泰然、ヤングレディ・スモーカーの吹かしつぷりは・・。

森林浴檜榿の気

高志

とつきに木曾の五木を思つたとは、互選評宏之助さんの弁。宜々、真性森林浴の賦である。どこの神域よ

りもまづは緑立つ木曾路を行こう。都会の片隅の林徑
散策のはそれはそれ、これぞ本家森林浴の誉れ、一読
忽ち、大きな檜風呂にとつぷり浸り、総身香氣に包ま
れた気分になった。出だし林間しめやかに、中頃、ゆ
つたり湯舟に息抜き、止め「氣」で娑婆に生き返る。

口遊む音律はまさに生体のリズムそのもの。「氣」はス
ピリットそしてエア、天地渾然の直中に在り。西洋の
哲人も言ったではない「自然に還れ」と。才氣煥発の
一句。

ぼうたんとして開けども水中花

幸一

季語はもとより「水中花」。花は牡丹、豪華豊麗、氣
品の花の王。とはいえ花は「水中花」、硝子の器に封
じられつきり。物言わぬ花の心は……。水中花に注ぐ
作者の視線が見えるようだ。さて「水中花」に何をみ、
どんな思いを託すのだろう。「ども」に籠る思いは深く
重い、正調の一句である。難物「として」を籠絡、
ひそかに沈み、出張らず手練。

蝙蝠や暮るゝに早き漁師町

多美子

昭和一桁生れの目にも、日本國中、家並、景色はす
つかり変わった。都会も農漁村も。でも人々の生業なり
いは営々と変わりない。特に漁の船出は今も朝早い。
そのかわり水揚げの賑いが過ぎると港町は静まり返る、
あしたの出漁に備えて町が暮れるのは早い。きまつて

上空を蝙蝠が飛ぶだろう。時空を超えて変わらぬ町の
氣韻が、人々の営みがそこにある。ただの叙景句では
ない。や」がずばり決まり奥深い情感が漂う。(7.24)

一句鑑賞(四・五・六月号)

飯田幸三

浅草の夜の賑ひや啄木忌

昭七

啄木の死は明治末年だが大正の人の印象が濃い。浅
草の賑いといえは、それを象徴するのは凌雲閣の明り
や花屋敷の人出だった。とみに賑いの戻った浅草を散
策しながら、啄木もきつと高樓の灯を見上げ、奥山の
人混みを歩いたに違いないと在りし日に思いを馳せる
のである。凌雲閣がいつ建てられたかはそれとし、時
代を先取りした多感な天折詩人を偲ぶにふさわしい啄
木忌の句。凌雲閣は関東大地震で崩壊した。「夜」は「よ
る」と読み、「や」をとり、「賑ひ」で切つたらどうだ
ろう。

はまなすの薫る砂山啄木忌

昭七

「はまなす」は海浜の花、浜は砂、「砂」は一々引く
までもなく、人口に膾炙した啄木名歌のゆかり。はま
なす(玫瑰)は沖ひろびろと未来を見はるかす。「玫瑰
や今も沖には未来あり」(草田男)。はまなす咲く砂山
に佇ち、天才歌人の早世を惜しむのである。名歌の歌
句や特別の地縁に拠らぬ点で、前句「浅草や」と共に

類想をみない、いい句だと思ふ。もし気になるとすれば「薫る」の情緒だろうか。

銭湯の煙もくもく啄木忌

敦子

煙「もくもく」が手柄。オノマトペは目に物見せてくれる。これは銭湯のけむりだが文明開化のシンボルSLの噴煙に通い面白い。明治の中頃には確か本州の北端まで鉄道が伸びていた。啄木も何度か蒸気機関車に乗ったことだろう。本郷辺りの銭湯にも通つたに違いない。啄木の生きたその時代を振り返る一句である。

雛罌粟の斯くしをらしき珠蕾

高志

開花の過程を見事にズームアップして見せてくれたみちさんの鑑賞があるので余分だが、「斯く」しをらしきが臍。万感息を呑む。「しをらしき」は控え目で、慎みがあり、可憐な風情、紅ほころぶ蕾を眼に珠と愛で慈しむのである。そして、間もない優美、妖麗、官能匂う花の盛りを想像する。あるいはふつと、かの閨秀歌人の相聞の歌を口遊むか。むべ別名麗春花。

兵の日はあり罌粟坊主青坊主

幸一

これも健二さん、陽一さんの割切な鑑賞がすでにあり余分。一読、あれこれの場面が脳裏をよぎる。私事だが、長兄が大陸河南の地に果てた。出征する前、母に髪を刈ってもらっていた坊主頭が目に浮かぶ。今や戦中戦後すら知る者は少ない。「あり」はその時代を実

地に生きた者ならではの「実感」、ずしりと重い。今も地上に戦火、戦斗は絶えない。「罌粟坊主青坊主昭和の雲湧いて」（三泥）、物まね戦中少年のこれは空疎にひびくのみ。

放たれて犬嗅ぎ回る首宿

みち

博覧な陽一さんによる名評があり駄弁で恐縮、「廻」るならぬ「回」るがまことに如実。犬の挙動が逐一手にとれるのだ。脱兎のごとく行き、ふと立ち止まりぐるぐる嗅ぎ回る。「首宿」が断然の決まり。はたまた私事で恐縮だが、以前毎日散歩に連れ立った飼犬の元気な姿が忽然と甦る。「もう飼犬が死んで十年首宿」（三泥）

病床の三社祭の遠音かな

昭七

隅田川川面揺り上げ三社祭

//

（前句）高志さんの明快な選評がすでにあり、どだい蛇足だが、病床「の」が臍。これが「に」だとく遠音を聞くことの報告、「の」はしみじみ身に入る病床の寂しさそのもの。三社祭の句で類例を知らない。（後句）「川」「川」の反復と相まって「揺り上げ」が三社祭の熱気と、続々、神輿の轟きを演出して心憎い。臨場感あふれる一句だ。ただ、「隅田川」と「三社祭」が重なるのが惜しい。

（平29・3）
7.3

俳窓評論纂

*朝日6月3日ひと欄にハエトリグモの図鑑を出す小学校教諭須黒達巳さん(28)が載った。昨年みちさんの蠅取蜘蛛の句をひろし先生が特選にとられた。私の畏友が最近蠅取蜘蛛を見なくなった、子供らはこの虫を知らないと頻りに言ったのを思い出したのでここに紹介する。カメラで撮っていると、顔付や模様が違う。

筑波大二年の時沖繩の離島で初めて新種を見つけ「ミカヅキハエトリ」と命名した。出版社から図鑑を出そうと声を掛けられたが、中途半端は嫌と大学院終了後フリーターになって採集旅行に出る生活を丸二年続けた。これまでにクモの新種を五つ発見し、13種に和名をつけた。国内で確認されているハエトリグモ105種中103種を撮影した図鑑を出版する。今は慶応幼稚舎の理科教諭になった。子供達からは「スグモ先生」と呼ばれている、というもの。蜘蛛だけの風狂だが、陽一さんの後継のような好青年が出てきました。

*6・27金子兜太さん海程終刊決意後の心境の見出しでかなり長い文が掲載。有季定型客観写生↓造形論(イメージ^{映像}を構築して俳句を作る)の作句の方法論である。取合論(許六)構成論(誓子)とかと同じであるが、自分の言葉で書いてそれが是と自負している。

(梅咲いて庭中に青鮫が来ている)はサンゴ環礁の島の周りに青鮫がたくさんいる。正月に寒紅梅が咲くと思いつく。梅が咲く頃の空気は青い。中に入っていくと海の中に入っていくような感じがある、と書く。

*駒場へ行った序に前から覗きたかった日本民藝館へ入って色絵の器を見た。その際民藝という機関紙774号をみちさんが購入した。その中の「作家の創作と工人の制作」―民藝における創造性の秘密(一)松井健の講演をもとに書き下ろした論考が載っていた。俳句の創作にも通じるのでここに紹介する。一々引用は控えますが、芭蕉の「雪舟の絵における利休が茶における其貫道する物は一なり」が思い起こされ、民藝の創造も同じと思つた。柳宗悦が「私の云う民藝とは一般民衆の使う日常生活の用品であるが、正しい質と懇切な仕事と健康な美しさを具有するものを指摘して云うのである」とか「民藝品だから美しいのでもなく民藝品でないものであるから醜いでもない。美しいものは、何ものにあれ美しいのである」とか、この著者が、柳宗悦が自分の云う美しいものについて、極めてわかりやすく、簡潔に書いたテキストがあると紹介されてある。美しいものは、正常、無事、当り前の素直なものであるゆえに美しいのであり、「民藝の美を見るときは、そういう『平』の美を見届ける事である」という。特定の

立場の固執などない自由さこそが民藝の美しさを支えるのである。「自由が形をとった時、美しいものが生まれる」と極限される。ではどうすれば作れるのか。二つある。一つは直登する自力道、難行道である。もう一つはすでにある伝統の中に身をおいて、そこから美しいものを追おうとするものである。他力道である。易行道である。後者の方法が凡人の道として取るべき道だと思う。その際、伝統の中から作家は自分の学ぶべき美しいものを自力で発見しなくてはならず、しかも、その美しいものを漠然と受容するだけでなく、それを自分の創作に役立てなくてはならない。要するに、作家の創造は、昔から伝わっている美しいものをよく見て、そこからその美しいものの根元を学び取り、それを自分のものとして、よく消化吸収して、自分の作品として、手から作り出すことであるといえよう。文藝である俳句は言葉から作り出すのであるが、民藝も俳句もその貫道するものは同じであると痛感した。

*松村幸一さんから「利根川凶志」という題でのエッセイ一枚を貰った。平成26年6月の屋根に載ったもの。布佐の対岸の利根町は旧布川であって、赤松宗旦の墓がある。江戸末期に利根川流域の風土を科学的な目で正確に書き残した地誌である。幸一さんはこの本を手に入れるまでの苦勞を書かれておられる。白金葎

記念号に載せられた利根川の句はこの地誌の名残を持つ名句だと今も思っている。利根川凶志は「北越雪譜」の影響もあるらしい。菅江真澄の「遊覧記」、それに近藤富蔵の「八丈実記」とも同じく郷土愛がなければ書かれていない。私は本居宣長も日本を愛するが故あの古事記伝を成し遂げたのだと思う。幸一さんは江戸時代呼塚河岸と呼ばれた桜並木の道を往還してこの本を入手された。利根川凶志を愛するが故この文章を書かれたのだと私は思う。

受贈誌（H 29年7月号）

つき香を発す刈草乾きつつ（彩135号） 平野ひろし
 杭を打て綱もつと張れテント張る（〃） 〃
 キャンプ張る赤ん坊連れて犬連れて（〃） 〃
 涅槃西風石抱く幹にキリル文字（〃） 杉山晃美
 末黒野に奔る太陽キリル文字（〃） 遠藤恵子
 一湾を大きな窓に夏座敷（東京ク7月） 文男
 梅雨晴の秩父盆地の夕支度（〃） 万世遊
 木曾川を瞰る犬山城五月雨る（〃） 理佳江
 山裾の如意輪観音濃紫陽花（〃） 守啓
 女坂落花の帯の富なして（あすか7月） 山尾かづひろ
 山尾かづひろ吟行ノート（H 29・7・7）
 牛蛙線路はつづくどこまでも 飯田孝三

口あけあけて親待つ燕の子
賑ははし越して十年雛燕

光みち
光成高志

「修羅」と「ひと」―賢治の「修羅」について武者昭七

詩集「春と修羅」（大正十三年刊行・賢治廿八歳）なかの一篇（同じ題名の）「春と修羅」のなかに次のような不思議な一節があります。

草地の黄金をすぎてくるもの／ことなくひとのかたちもの／けら（雨天に農夫が身に着けるもの。蓑）をまとひおれを見るその農夫／ほんたうにおれが見えるのか
草地を踏み分けてくる農夫にむかつて「おまえに本当にこのおれが見えるのか」と強い口調で問いかけているのです。相手が目の不自由な人でない限り普通はこんな問いかけはしません。自分はこの農夫には見えていないのかもしれないというおそれと疑念がそういわせるのです。なぜなら「おれは一人の修羅だ」からと賢治は思うからです。目の前の農夫は間違いなく「ひと」である（「ことなく」「ひとのかたち」のもの）のに自分は「修羅」だということです。修羅と「ひと」とは仏説にいう六道を輪廻する存在でありながら住む世界もなにもかも決定的に違うのです。異次元の世界なのです。「土神と狐」という童話はそれをリアルに描き切っています。土神は誇り高く傲慢でしかも嫉妬ぶかい、

時には暴力さえ辞さない恐ろしい存在でした。土神は修羅道に堕ちた存在なのです。賢治における「修羅」とはそういう世界を生きるものだったのです。だから賢治が「おれはひとりの修羅なのだ」というとき、輝きの春の景色のなかにいながら、「ひと」としての賢治の「かなしみは青々ふかまり、風景はなみだにゆすれ」てしまうのです。「このからだそらのみじちんにちらばれ」とは修羅をぬけだし、玲瓏の春の大气の中に拡散してしまいたいという賢治のせつない願いのことばなのです。

修羅意識が賢治を強くとらえている場面は妹トシの臨終の場面（「無声慟哭」）にもみられます。トシが死に近い自分の顔つきやら体臭やらのひどさを気にして懸命に尋ねるのを賢治もそれを感じながら、あえて「ほんたうにそんなことはない」と否定するいっぽうで「わたくしにはそれをいまいへないのだ」と口をつぐんでしまいます。「わたくしは修羅をあるいているのだ」からというのがその理由です。いままさに「人間界」を離れて聖なる「天上界」に転生しようとする妹に向かって「修羅道」にある自分は見え透いた慰めの言葉などかけることはできないのです。賢治の出来ることは「かなしさうな目をして耐えていること」だけなのです。だから「わたくしのかなしさうな目をしてい

は、わたくしのふたつの心をみつめていたためだ」と賢治はいいます。「ふたつのころ」とは死んでいこうとする最愛の妹に寄せる兄として、「ひと」としてのころであり、もうひとつはそれを許されない「修羅」を生きるものの決意でありころです。賢治はそんな「ふたつのころ」「ふたつのせかい」を生きたのです。賢治にとって「修羅」とは「比喩」ではなく、たしかに「実存」であつたのです。修羅道を生きる賢治のかなしみと形相のすさまじさを賢治は以下のようにうたいます。

四月の気層のひかりの底を／唾しはぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ・・・雲はちぎれてそらをとぶ／あかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ・・・。

(注) 六道 衆生が善悪の業によっておもむくとされる六種の境界で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上のこと。この六道の間を生れ変わり死に変わって巡り歩くさまを六道輪廻という。輪廻の輪を断ち切る作業が修行である。

お便り広場 (到着順、敬称略)

前略一周忌において頂けるとのこと大変嬉しく存じます。ところで時間を変更しましたのでお報せまで。

(中略) 追伸…「小熊座」誌に「20句選」というのが

あり、二人の同人が拙句「操り人形マリオネットの如く老軀を初湯かな」を採つてくれて居ります。俳人互に老齡を慰めあつている状態です。(8陽二)

梅雨とは云え、カラ梅雨が続いておりましたが、ここへ来てそれらしくなつて来たようでございます。白金霞七六号拝受。昨年の六四号と表紙を見比べてみました。同じ植物でも撮つた場所とか天候とか、又、昨年は黄色の紙で今年は白くなんにも見た目の印象は違うものなのに、ビックリです。高志様の翡翠の停止飛行、みち様の翡翠の一闪 カワセミ(生きています)をみられず残念。ご自愛下さい。(白紫蘭の絵葉書)(624瑠子)

六月号拝受、誌面いよく充實、作・選・随筆一体の旗印風になびく如くです。愚生の拙句も皆さんの名鑑賞を戴き面目一新。俳句は読者あつての文芸とつぐ感じて遂にワープロが壊れ後追いの鑑賞もままならず、御免なさい。お陰さまで松葉杖片方外れました。

七月にはぜひ伺いたいと思つています。木下遊船吟行の賑わい手にとれます。句会・編集発行と一切合切おまかせで済みませんどうかご無理なきようお願い致します。陽也さん、其の後如何でしょうか。急がば廻れ着実に快癒の歩を踏まれますよう日頃念じております。呉々もお体大切にご健吟のほどを

俱にあり昭和一斤青林檎

(26孝三)

前略 取り急ぎ要件のみ申し上げます。白金葎六月号と共にハガキと法隆寺参拝案内書届きました。(中略) 以上こちらの考えをまとめたものです。

追伸 ミサ子さんには何も話していませんが又折を見て話してみよう?かとも思っています。そちらからはがきでも出しておいて下さい。

梅雨末期自然災害詮方なし

(7.7 健三)

御健吟のことと存じます。各地で熱暑洪水頻々ですがお国やお身近の方々に被害はありませんか。きのうの診察で松葉杖から解放されました。あとは順次歩行に馴れるだけとなりました。八月三日の最終診察で放免となる筈です。ご心配をおかけしました。今月の例会には出られると思います。ぜひそうしたいと思いません。皆様と再会できるのが何より楽しみです。「白金葎」四月〜六月号掲載句々、毎月の鑑賞にのぼらなかつた句を主として、後追いの鑑賞を試みました。今更ですが、ご通覧下さい。何分にも乱筆ですので御目を痛められない様願っております。とにかく破天荒な梅雨模様です。ご夫妻ともぐ呉々も御身お大切に健吟の程祈り上げます。

七月七日

飯田孝三

雨もろくく降らずこのまゝ梅雨が明けるのでしょうか。お体調いかゞでいらつしやいますか。小山さんには会報お送りしていますがご覧になれる状況かどうか

不明ですが、何とか回復なさるようお祈りするしかありません。何をすることも健康第一ですが老いは一日一日と進み句会で疲れると限界を感じることもあります。ご近所に蛍の飛び交うところがありがたいような気がします。虫なのに夜の闇に美しい光を放ち人を怯はせるなんて同じ虫でもヒアリなんて困りものは人を騒がせ国中のサワギです。これから続く暑さお体お大切になさいます。

(7.11 璃子)

暑中お見舞い申し上げます。「ほつほつと木樫地に落つ 苫屋かな」(寥廓) 樞花一朝の夢ということわざは、(以下略)

(7.22 征司)

毎週一回あつた源氏物語講義が終わって同級生の髭面の主宰との端居語りのような雑談が楽しめなくなつた。なんだか一週間の句読点が消えてしまったよう、ちよつぱり手持ち無沙汰で寂しい気分です。教室と帰りの電車内の会話はいわば二人の芸林閒歩のごとくであり、そこでは常日頃着々と俳諧の古典的追求を重ねる大兄の高論にずいぶん啓発されました。その意味で七月例会のあと、旗亭コピアンにおける会員の歓談は楽しかった。陽一さんの復帰が待たれます。例会前の時間に炎天下、実篤邸探訪という独り吟行をした宏之助さんには脱帽しました。

(7.23 健二メール)

先日は御世話になりました。久し振り楽しい一時でした。陽さんの一日も早いご回復と再会をお待ちいたします。「二句鑑賞」の拙稿をお送り致します。御目を痛め恐縮ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。猛暑の折ご自愛ご健吟を。

(7.24孝三)

暑中お見舞い申し上げます。お早々とお見舞いありがとうございます。お障りなくおすごしのご様子何よりと嬉しく存じ上げます。大観の杏まさにさわやか気分を味わいました。デンデン虫まで描かれていますね。我が家の杏は野鳥の絶好のタベモノで、今年やつと十個手にし、ジャム小壘二個出来ました。生ですと甘いのにジャムに煮るとすっぱくお砂糖をアメになる寸前まで入れました。どこへも行かずやつと義務感から小石川の寺へお施餓鬼に行き乗物と長時間の法話法要で疲れ果てました。若い中に行きたい処へは多少のムリをしても行くべきと思います。光成様もお元気にしていらっしゃいますか。小山さんのその後は？

大夕立けむりし方によもつくに

光みち様

(7.25 璃子)

我孫子日記

6/17	木下吟行
6/20	悦子さん一年忌
* 6/21	SOA
6/24	*2 二階堂和美
6/28	SOA
7/2	猪鼻公園
7/6	*3 駒場
7/19	柏アミュゼ
7/21	例会

*空梅雨やほんに妹御と思ふ

高志

*2 「一本の鉛筆」の声よく通る

〃

*3 片口の藁の模様の涼しけれ

〃

夏館リーチの赤絵我孫子の字

〃

野草園射干の朱の目立ちをり

〃

梅雨灯し螺鈿重箱輝けり

みち

大皿を池に見立てて蓮の花

〃

編集後記

鑑賞文が多く寄せられたので、軽み(36)は割愛しました。八月は句会を休みますが、その他は掲載します。昨年と同様です。昔と暑さが違います。元氣に来々月にお会い出来ますように。

白金霞7月号(通巻第七七号)平成二九年7月26日発行

編集・発行人 光成高志

発行所 一七〇・一一一九 我孫子市南新木二二四・二七

☎・fax 〇四一七一一八七一一〇六八

表紙の題字・加納綾女 同写真は7月26日の白金霞